



TITLE:

[書評]塩川徹也『奇蹟と表徴』(岩波書店, 1986)

AUTHOR(S):

広田, 昌義

CITATION:

広田, 昌義. [書評]塩川徹也『奇蹟と表徴』(岩波書店, 1986). 仏文研究 1986, 17: 131-134

ISSUE DATE:

1986-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137710>

RIGHT:

塩川徹也『奇蹟と表徴』（岩波書店、1986）

広 田 昌 義

1656年3月24日、Blaise Pascalの姪、Marguerite Périerが、Port-Royal de Parisの修道院におかれていた<Sainte Épine>（キリスト受難の際の荆冠の遺物とされる）に触れると、3年半近く苦しんでいた彼女の涙癢は劇的に快癒した。この「聖荆の奇蹟」が、Blaise Pascalの*Pensées*執筆のきっかけとなったことは、1684年アムステルダムで出版された*Pensées*の巻頭に初めて付された、Gilberte Périerの*La vie de Monsieur Pascal*に述べられている。その箇所を塩川氏の翻訳によって引いておこう。

私の娘は弟の名付け子であった。しかし弟がこの奇蹟に強く心を打たれたのは、むしろ神の栄光がそれによって讃えられ、また世の大方の人が生ぬるい信仰しか持っていない時代に奇蹟が現われたという理由によるのであった。弟がそれから受けた喜びは全身全霊を貫かれるほど大きかった。そして弟は何事にせよ一旦ものを考えはじめると、それを深く反省せずにはいないたちだったので、この特殊な奇蹟を機縁として、旧約と新約の奇蹟全般について多くのまた極めて重要な考えが生れた。
[……]

弟はこれらすべてを驚嘆すべき明快さでもってときほぐした。彼の話に耳を傾け、彼が旧・新約両聖書の伝える奇蹟の状況すべてを詳細に論ずるのを聞くと、これらの奇蹟はわれわれには明白なものに思われた。それらの真実性も、またそれらから彼が神と救世主の証拠として引きだす帰結も、否定することはできなかった。そんなことをしたら疑う余地のないほど確実な事物すべての基礎となっている共通原理に矛盾するはめに陥ってしまうことになっただろう。このことに関する弟の考察のいくらかは収録されたが、それはごくわずかなので、弟の考えをもっとはっきりさせるためには、弟から聞いたことすべてに従って、さらに敷衍する必要があると思うが、幸い弟の友人のひとりがモーゼ五書に関する論考を著され、その中でそれらのことすべてを、弟に恥じない仕方で見ごとに解明されている。それゆえ読者にはその著述を読んで頂くことにして、私としてはここに伝えるのが肝要なことだけを付け加えるにとどめる。それは弟が奇蹟に関して行った様々な考察が、宗教に関して多くの新しい光明を弟に与えたということである。あらゆる真理は次から次へと引き出されるものであるから、弟がそのうちのひとつに専念するだけで、他の真理はいわば群をなして現われ、弟がしばしば口にしていた表現に従えば、彼自身を無我夢中にさせるほど、彼の精神の眼前で解きほぐされるのだった。そして弟はこれをきっかけとして無神論者たちに非常な憤りを感じたあまり、神が彼に与えたもうた光明の中に、彼らを完膚なきまでに論破し、ぐうの音も出せないようにする手立てを見てとって、この著作に専念した。そのうち今集められた部分を見るだけでも、弟が自分自身でそれを集め、さらに書き足した部分を加えて、完璧な美しさをそなえた一つの作品にできなかったことが、深く惜しまれるのである。（塩川徹也、『奇蹟と表徴』、pp. 137, 222, 223, 226）

塩川氏の著書は、Gilberte のこの証言についての、詳細緻密な分析と解釈だということができる。すなわち、Pascal の奇蹟についての考察とその展開が、つぎのような順序で論述される。

まず、Pascal の時代において奇蹟がどのような問題性を有していたかが、広範囲にわたる文献の渉猟・分析を通じて明快に論じられる。奇蹟の批判者たちと擁護者たちの論説を手際よく紹介し、問題の中心が自然と超自然との関係にあることを浮き彫りにしたのちに、塩川氏は Pascal の自然観についての考究へと歩を進める（第一章「十七世紀フランスにおける奇蹟の問題」、第二章「自然と超自然——パスカルの自然観」）。

次いで、「聖判の奇蹟」が起きたときの状況、公式に奇蹟として認定されるまでの経緯、この奇蹟が引き起こした論争が、未公開資料を駆使して詳細に記述される。そして、*Pensées* の奇蹟関係の諸断章、Mlle Roannez への書簡、*Provinciales*、等の *textes* の精細な分析によって、Pascal の奇蹟についての立場が明確化される。すなわち、Gilberte の *texte* にある、「世の大方の人が生ぬるい信仰しか持っていない時代に奇蹟が現われた」という言葉の含意、あるいは、「この特殊な奇蹟を機縁として、旧約と新約の奇蹟全般について多くのまた極めて重要な考えが生れた」ということの具体的な内容、そしてまた、奇蹟から Pascal が神と救世主の証拠として引きだす帰結が何であったか、これらの点が厳密な文献学的手続きと鋭い洞察によって解明されている（第三章「聖判の奇蹟——事件とその波紋」、第四章「パスカルと奇蹟」）。

最後に、Pascal が生前構想していた「キリスト教についての著作」と、奇蹟についての考察との関係が論じられる。「奇蹟に関して行った様々な考察が、宗教に関して多くの新しい光明を弟に与えた。[……]そして弟はこれをきっかけとして無神論者たちに非常な憤りを感じたあまり、神が彼に与えたもうた光明の中に、彼等を完膚なきまでに論破し、ぐうの音も出せないようにする手立てを見てとって、この著作に専念した。」と Gilberte が述べている部分について、塩川氏独自の解釈が提示されるのである（第五章「奇蹟と『パンセ』——『護教論』の構想の成立」）。

以上のような構成が端的に示しているとおり、本書は、奇蹟の問題を中心にすえて、Pascal の伝記的事実についての新しい知見を提出すると共に、Pascal の科学思想の特質を明らかにし、かつまた Pascal の『護教論』構想の契機を解明しようとする、極めて野心的な試みである。

*

パリの Bibliothèque Mazarine に、聖判の奇蹟についての供述調書の写本が保存されている。これは「奇蹟」が起きてから三ヵ月後の五月二十七日に、当時のパリ大司教代行 André du Saussay が Marguerite および関係者二十五名から、彼女の眼病とその治癒の事情について訊問したときの記録のコピーである。関係者とは、Marguerite の父の Florin Périer、姉の Jacqueline、叔父叔母に当たる Blaise Pascal と Jacqueline Pascal、診察にあたった医者たち、そして Port-Royal の修道女たちである。このうち、Pascal の供述だけは、1962年に Jean Mesnard 教授によって公開されたが、他の調書は現在までのところ研究者によって利用されていない。塩川氏は、第二章の「一。マルグリット・ペリエの病氣と治癒」ならびに「二。奇蹟の認定訴訟」で、この資料を十分に活用して、「奇蹟」が教会によって公式に認定されるまでの経緯を追っている。これは、従来の研究書には見られなかった記述であって、本書が含むもっとも興味深い箇所の一つとなっている。慇を言えば、この供述調書と、パリ大司教区裁判所における奇蹟認定審理の記録については、その内容をもっと詳細に紹介してもらいたかったところである。（「奇蹟」関係資料のすべてが収録されるはずの、Jean Mesnard 教授編集 Blaise Pascal, *Œuvres Complètes* (Disclée de Brouwer) の第三巻は依然として未刊)。

聖判の奇蹟は、Jésuites と Port-Royal との間の熾烈な神学論争の最中におきた。従って、この奇蹟は必然的に政治的意味を持つことになる。Pascal はむしろのこと、「奇蹟」が Port-Royal 側の主張の真理性を示すものと考えた。しかし、世論に対して、あるいは教会当局に対して、そのことを納得させるために

は、第一に「奇蹟」が真正のものであること、つまり超自然的性格をもつことが立証されねばならない。「奇蹟」は公認され、第一の問題は解決された。しかし、より厄介な第二の問題がある。それは奇蹟の意味に関する問題である。1656年8月に出版された12ページのパンフレット、*Rabat-joie des Jansénistes ou Observations nécessaires sur ce qu'on dit être arrivé au Port-Royal au sujet de la sainte Épine* (Jésuiteで国王聴罪司祭をつとめていたFrançois Annat神父が著者と推定されている)は、教会史家Baroniusがあげている例を引いて、奇蹟は異教徒あるいは異端者を回心させるために起きることがあると指摘する。そして、異教徒あるいは異端者がだれであるかはカトリック教会の教義によって決定されるが、その教義の決定権は、教会の首長である教皇が有していると述べる。従って、教皇が教義を決定し、教義が奇蹟の意味を決定するということになるのだ。ところで、Janséniusの教義は教皇によって異端とされ、Port-RoyalはJansénisteなのだから……これに加えて、1657年2月、JésuiteのClaude de Lingendesは、奇蹟をテーマとする数回の説教を行って、悪魔の力による奇蹟もあると述べて、暗に聖判の奇蹟を疑問視した。このような、Jesuites側からの反撃に対して、Pascalは奇蹟についてのパンフレットを出して応戦するつもりだったらしい。そのためのノートと考えられる断章が残っている。塩川氏は、奇蹟の意味をめぐるこのような論争と、Pascalの対応について、第二章の「三. 論争」および第四章のすべてを費して詳しく論じている。実は、塩川氏の著書はこのあたりから本題に入るのである。

Gilberteが言及している「弟が奇蹟に関して行った様々な考察」(*Pensées*の第一写本末尾にLafuma版の断章830から912まで)が、第四章「パスカルと奇蹟」において分析の対象となる。この章における主要な論点は、「表徴」である。「奇蹟と表徴」の標題が示しているように、塩川氏の狙いのひとつは、*Pensées*全体を覆っている表徴の観念と、Pascalの奇蹟についての考察との関係を突きとめることにあったのだ。奇蹟に関する考察の一部をなす、断章L. 930-B. 851について、塩川氏は言う、「ここで注目すべきは、パスカルが今や象徴主義的な見方をユダヤ教とキリスト教の関係に適用していることである。ところが、既に見たように、第一の回心の時期には、彼は同様の象徴主義の関係を教会と自然的事物の間に見ていたのだった。この観点の変化は極めて重大である。なぜなら、『キリスト教護教論』においては、表徴の理論は自然の解説に利用されるのではなく、旧約聖書に記載されたユダヤ人の存在、その歴史と律法、さらに救世主の予言を解釈するために利用されることになるからである。」塩川氏の文章における、象徴から表徴への用語の微妙な変化。それは、奇蹟についての考察がPascalの思想にもたらした変化の重要さと微妙さを暗示しているかのようである。奇蹟も、他のすべての宗教的事象と同じく、表徴である。すなわち、ある人々にとっては、その意味は明白にとらえられるが、他の人々にとってはそうではない。奇蹟に対する盲目と明察。この両者の間に存在する愛の問題。塩川氏の分析はPascalの思想の秘奥へと至る。こうして、第四章はもっとも内容豊かな章となっている。そして、この章で示された、明白さに対する同意への抵抗という人間的事象が、第五章で呈示される『護教論』の証明の構造を導きだすのだ。

最終章において、塩川氏は奇蹟についての考察と、『護教論』の論証とを、証人の問題において重ね合わせる。奇蹟に関する考察から導きだされたキリスト教についての「多くの新しい光明」とは、キリストに敵対したユダヤ人たちがこそがキリスト教の真理性の証人であるという直覚から導きだされたものだというのが、塩川氏の「一つの仮説」である。「パスカルが奇蹟に関する思索を進めていく途中で、キリストの奇蹟を眼のあたりにしたユダヤ人の不信仰を護教論の論証に組み込むことができると意識した瞬間がおそらくあったと主張できるのではあるまいか。」と、氏は問いかける。「ユダヤ人によるキリストの拒否は、[……]一方ではメシアを眼前にしたユダヤ人の不信仰に関する予言を成就することによって、他方ではユダヤ人がその保持者であった旧約聖書、特に救世主に関する予言の信憑性を保証することによって」Pascalの護教論的論証において重要な役割を果たしている。このことは、いわゆるユダヤ民族証人説として、従来から認められていたところであるが、塩川氏は、この点こそが、Gilberteが述べている「無神論者を完膚なきまでに論破し、ぐうの音も出せないようにする手立て」であり、この着想において「奇蹟に関する著作と護教論との二つの企ての間に決定的な視点の変化が生じた」と考えるのである。

*

以上見てきたように、塩川氏の論旨の運びは、間然とするところがない。敢えて、望蜀の念を述べるとするならば、表徴理論とユダヤ証人説との関係については、もっと突っ込んだ説明が欲しかったところである。もっとも、この点は *Pensées* について論ずるときに、Gilberte の問題設定の枠組を、そのまま受け入れることが妥当かという大問題と連関してくる。Pascal が「キリスト教についての著作」を構想したときに、その著作の真の目的が、無神論者に対してキリスト教の真理性を証明することだけであったのか否かについて論じはじめるとすれば、*Pensées* について、べつの論文を用意しなければならないだろう。

(京都大学教授)